

要害山城の構造

千田嘉博

はじめに

要害山城は山梨県甲府市上積翠寺町丸山（要害山）に所在する。

標高七七五m、比高二五〇mの山城である。すぐ南東の尾根には支城といわれる熊城があり、ある時両者はセットで使用されたと考えられる（図一）。創築は『高白斎記』がいう永正一七（一五二〇）年とされる。翌大永元（一五二一）年には今川氏が甲斐国に侵入し、武田信虎夫人などが要害山城に避難したという。また天正四（一五七六）年には武田勝頼が要害山城を修築したが、その後新府築城に踏み切ったので、根本的な改修ではなかったと考えられる。

このように要害山城は古くから武田氏の居館、躰躅ヶ崎館の詰め城として知られ、武田氏の城の代表として注目されてきた。しかし近年の城館構造研究の進展で、武田氏滅亡以降の改修を受けていることが指摘され、改めて、城郭構造の再評価が求められている。

そこで本稿は、要害山城とその南東に位置する熊城の構造を考古学的な地表面観察によって把握し、改修の有無、築造年代の推定を行う。そして城館構造研究の成果を地域史に位置づける基礎をつく

ることを目的とする。なお現地調査は一九九〇年四月一六日と七月七日に行った。

一 要害山城の研究

要害山城に係わる成果は多いが、ここでは本稿と関係する遺構分析の主要な研究を概観する。

本田昇氏は「要害城」で縄張りの特徴の検討を行い、「武田氏が滅亡したあと、徳川氏、加藤氏などにより大改修され、そのとき数多くの石垣が築かれたものと考えられる。（中略）いずれにしても後に虎口（城館の防御された出入口・筆者註）などを中心に大改造されたことは事実であり、この城に武田氏の築城の面影はあまり残っていない」というべきであろう。^{〔1〕}としている。

これに対し八巻孝夫氏は「岩殿城」のなかで要害山城にもふれ、要害山城にも見られるような尾根筋を切る、堀切に架けられた土橋の両側を直接堅堀にするのが武田氏の山城の特徴であるとした。^{〔2〕}さらに池田誠氏は「武田氏築城術の一考察」で堅堀の配置と虎口の関係を指摘し、要害山城北西端の二本の巨大な堅堀の間を登るの



図1 要害山城とその周辺

が、本来の城道であるとした。そしてこのような特徴は白山城（韮崎市）などにも見られ、堅堀と虎口を組み合わせてつくること（本稿図三の虎口g部分）、ルートを限定的に設定したことが武田氏の築城技術の一つと評価した⁽³⁾。

また秋原三雄氏は「甲斐武田氏の城と戦術」で要害山城の南東に位置する熊城の果たした役割を指摘し、両者を合わせて評価することの重要性を説いた。

二 熊城の構造

先学の要点を整理すると、①要害山城の評価は熊城を含めてすべきである。②要害山城に見られる武田氏の城郭プランの特徴は、a堀切を直接堅堀にすること、b堀切と虎口を組み合わせていることである。③虎口を中心に天正一〇年以降の改修が認められる。という三点に集約される。そこで諸点に留意し、先学の成果に導かれて筆者が作成した遺構図を示し、具体的に検討していく。

熊城は要害山城と谷一つ隔てた南東の岩がちの瘦せ尾根に築かれている（図二）。要害山城とは若干の比高差があり見下ろされる位置になる。後述するように縄張りから武田氏以前の城郭である可能性はない。またこれほどまでの至近距離に築城主体を異にして城が築かれるのは、付城しかなく要害山城の場合そうした可能性は考えられないでの、文献からは確認できないが、熊城は要害山城の支城と評価すべきであろう。

熊城は尾根続きを遮断するため東方に堀a・bを、西方に堀cを入れ城域を画す。堀切はいずれもそのまま深い堅堀となつて斜面を区切る。堀bには土橋が架けられているが、両側の曲輪（防御され

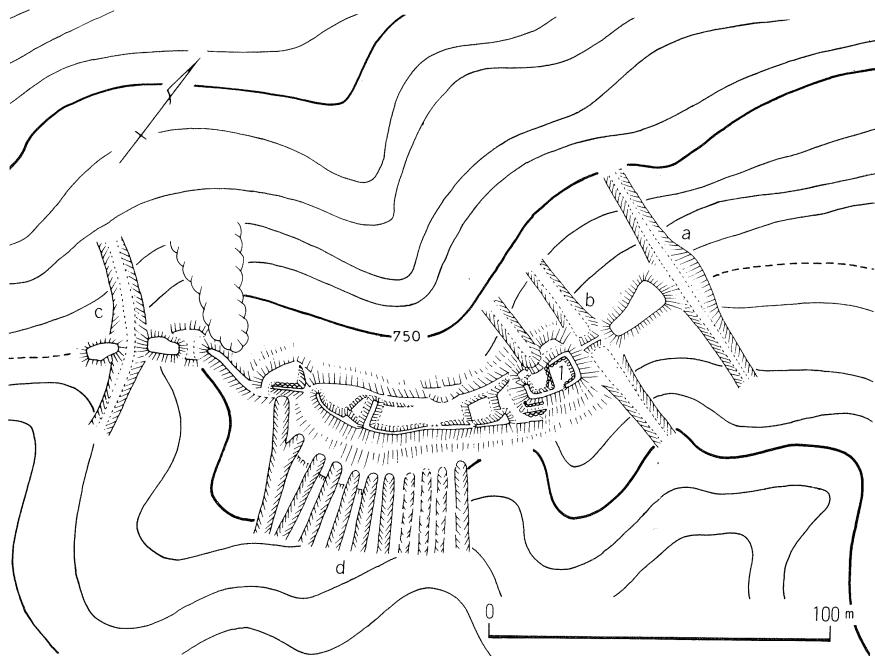


図2 熊城要図 (千田作図)

た人為的な削平地) 面までにかなりの落差がある。主郭は1で三方に土塁が巡る。主郭1の土塁内側など城内の所々には石積みが認められる。小型の自然石もしくは自然石を切斷して積上げたもので、いわゆる穴太積みの石垣ではない。主郭と下段の曲輪とはスロープ状の土塁をつたって出入りする。

これから南西へ六つの曲輪が連なる。一貫して南方に土塁を持ち、防御の要点がこの方面にあることを示している。また各曲輪をつなぐ虎口は土塁の反対の北側にあり、単純だが洗練された構成を持つ。この城を大きく特色づけるのは連続する郭群の南下に築かれた敵空堀群dの存在である。現在十本の痕跡が確認され、このうち明瞭なものは六本程度である。敵状空堀群と上の曲輪とは数メートル以上離れていて、連絡はよくない。また空堀群が築かれている斜面の傾斜はかなりきつく、敵状空堀群の設けられた斜面としては、最も厳しいものの一つである。

しかしこの部分を地形図で見ると、小さな尾根が南に伸び始める所で、この空間を敵状空堀群によつて潰し、敵兵の集團行動を制限して、城兵の曲輪内からの防戦を有利にしようとしたものと考えられる。敵状空堀群はその構造から大きく二つに分類される。一つは敵状空堀群だけを使用するもの(第I類)、もう一つは敵状空堀群の最上部、いわゆる頭の部分を等高線と平行に伸びる横堀でつなぎ、敵状空堀群と横堀を組み合わせたものである。(第II類)。

横堀が山城で使用されはじめるのは、概ね永禄期なので⁽⁵⁾、複雑な構造を示す第II類はそれ以降につくられたことことが明瞭である。武田氏も各地への遠征時に築いた城郭に横堀を多用して有名な丸馬出しを完成させており、永禄期以降は横堀による曲輪の機能分化を実現

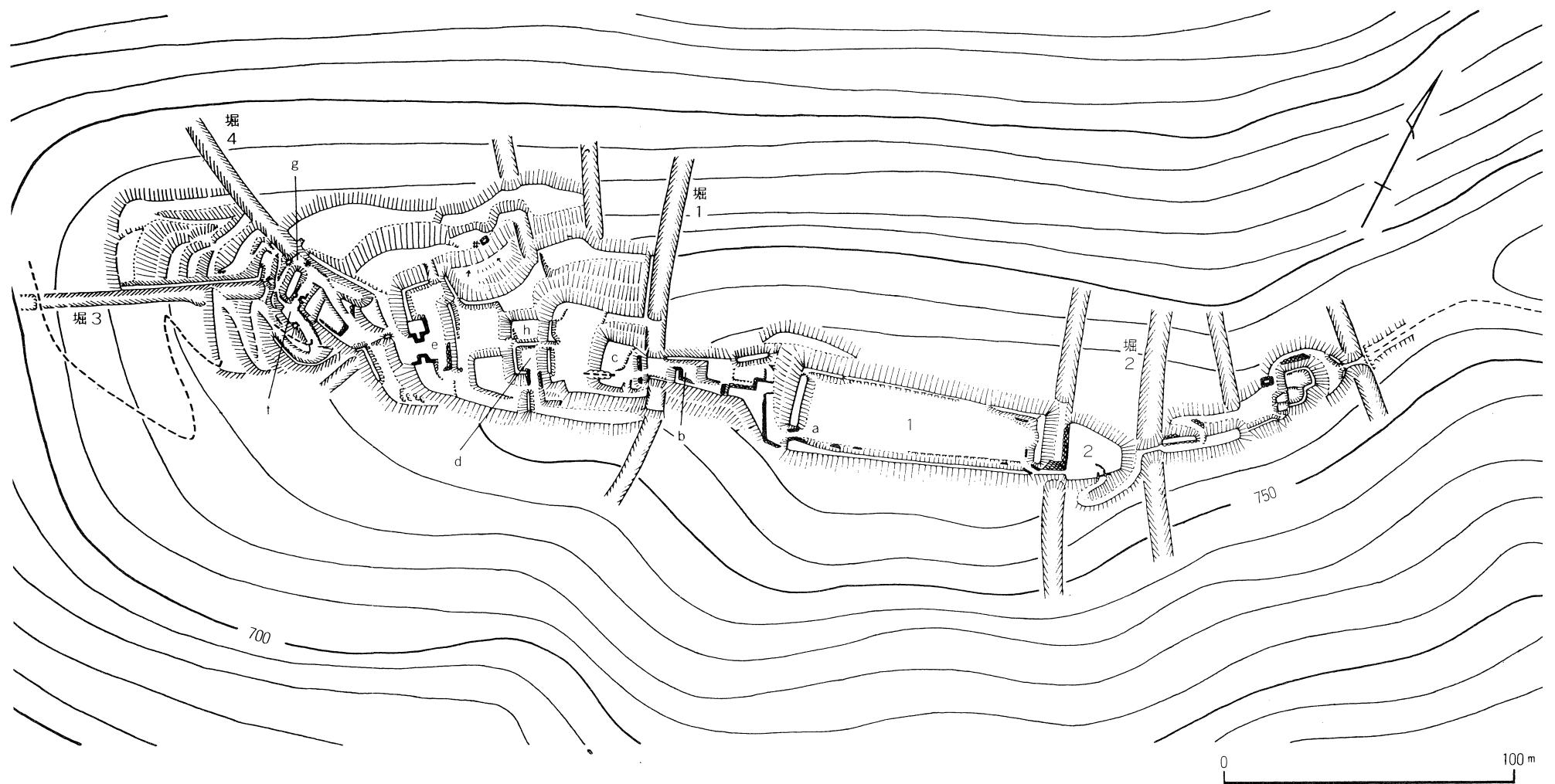


図3 要害山城要図（千田作図）

している。このように考えると、横堀を使用せず、初源的な第Ⅰ類の敵空堀群のみを使用した熊城形成の画期は天文期以降～永禄期以前とができる。

この時期は甲府、躑躅ヶ崎館城下町の骨格が一通り出来上がった時期で、大永元（一五二一）年の今川氏の侵入を契機に築かれたと推測される熊城は、城下町の充実に伴って、本城要害山城と共に再整備されたのであろう。

三 要害山城の構造

要害山城は東西四〇〇m以上にも及ぶ堂々たる山城で多数の曲輪、堀切、堅堀を複雑に組み合わせて構成されている（図三）。現在ハイキング道が城内を通っているので主要部の調査は比較的行いやすいが、所々で遺構を破壊して、正しくないコースをとっているのは残念である。早急な改善が求められる。

要害山城は堀1と堀2に囲まれた内側を中心郭群とし、堀1より西を大手ルート上の多彩な機能を持つ前衛の郭群、堀2より東を尾根続きに対する後衛の郭群とし、三つの部分を合わせることでつくられている。要害山城の基本的な構造はすでに先学が指摘しているので、以下虎口とその入り方に注目して分析を進めよう。

1が主郭である。さわめて律義な四角いプランを狭隘な山上にくりだしている。一部北側で土塁の痕跡が認められない部分があるが、本来四周すべてに土塁を巡らしていたと考えられる。ただし、正面の谷が広がる南側の土塁が北側より高さ・厚さ共に大きい。そして虎口が開く東西の土塁はさらに大きくなっている。しかし土塁上に櫓が建つほどの広さはなく、櫓の一端を曲輪に、もう一端

を土塁上に乗せるものでないかぎり、曲輪端部に迫り出した櫓状の建物はなかつたと考えられる。

主郭1の正面虎口がaである。a自身は両側を石垣で固められた単純な平入りの虎口を基本にしているが、虎口を出た所に石垣が付加されたことで、虎口全面で大きく一度曲がって進入する構造になっている（図四）。

虎口bは中心郭群を画する堀1を入った所に設けられており、重要な位置を占める。この部分も土塁内側に石垣を築き、改修した痕跡が明らかである。この土塁のために上の曲輪との組み合わせが生じ、進入するには一度曲がって虎口空間bを経て、さらにまた曲がって進む構造になつていてある。

虎口cは中心郭群から一步踏み出した所にあり、攻撃的な性格を持つ。堀1の尾根部分が土橋でなく、広い曲輪のまつながらついて、一体性はきわめて強い。現在ハイキング道は西からまつすぐ曲輪内に入るが、これは破壊道で、本来は南にまわり込んで側面から入った。こうした構造はいわゆる馬出しに共通する点が多く、虎口cの曲輪を馬出し的機能を持つものと評価できる。主郭後方の曲輪2も同様の性格とすることができよう。虎口dは典型的な外枠形の形態を示す。同じ枠形でも、武田氏が多用したコ字形に土塁を合わせた、地道直進型の枠形とは明らかに異なる。枠形のため進入するには一度曲がって、虎口空間dを経由し、さらにもう一度屈曲することになる。外側の虎口の通路部には石垣を備え、改修の跡が認められる。

しかしここで注目すべきなのは北側の平場hとの関係である。dとhはほぼ同じ高さで幅も等しい。両者は唯一dのまわりを巡る土

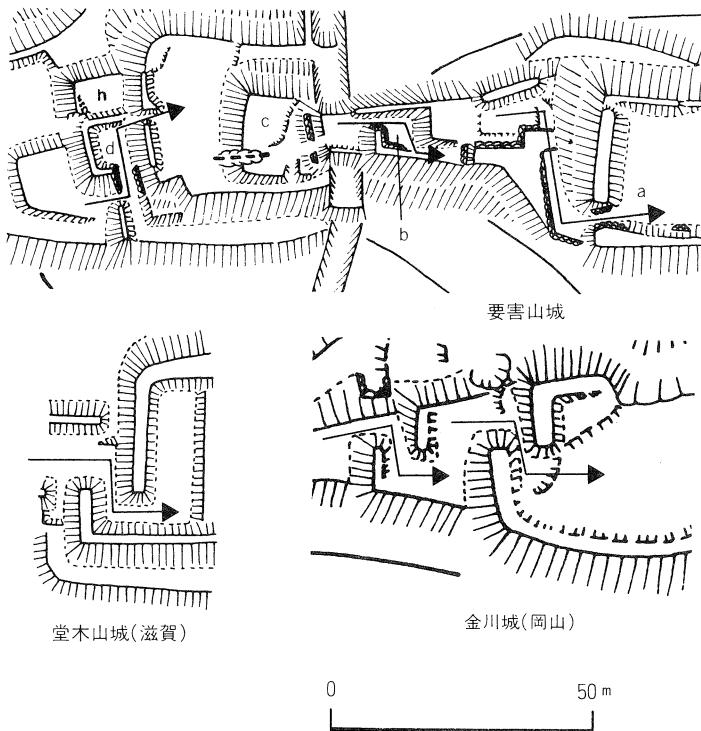


図4 要害山城の虎口比較図

虎口 e は要害山城で最も整った、立派な城門である。虎口後方には上の曲輪の城壁が迫っており、武田的でない城道が屈曲するタイプの内枠形として機能したと考えられる。そしてこの虎口は他と明らかに違う大型石材の石垣で固められている。虎口形態の洗練さ、石材の大きさと積み方から、最も改修年代が下る部分と考えられる。虎口 f は現在の主要な登城ルートに連なる城門で、山麓から登つてくる時に立ち塞がる最初の門である（図五）。後方の城門を出た位置の f は若干の広場となっていて、特別な虎口空間として機能する。馬出し的性格としてよい。そこから麓へ城道は堀 3 の南側のコースをほぼ往時に正しく下っていく。堀 3 の北側には高い土塁とテラス状の削平段が備えられ、城道をはずれて北側斜面に敵兵がまわり込むのを防ぎ、さらに登城者に厳しい横矢（側射）を常に浴びせる。

一見何の矛盾もなく、整然とした構成だがはたしてこ

墨だけで区別されている。外枠形のつくられ方としてはかなり特異である。こうした特徴から、外枠形がつくられる改修以前、 d ・ h は一つづきの腰曲輪だった可能性が高いと考えられる。つまりある時期、腰曲輪の南半分を虎口空間に強引につくり変えたのである。こう考えれば d ・ h 間の処理の違和感もうまく説明できる。ただし、現状では外枠形の土塁に直接ハイキング道が上がってしまい、遺構をかなり痛めている。適切なコース変更が必要だろう。

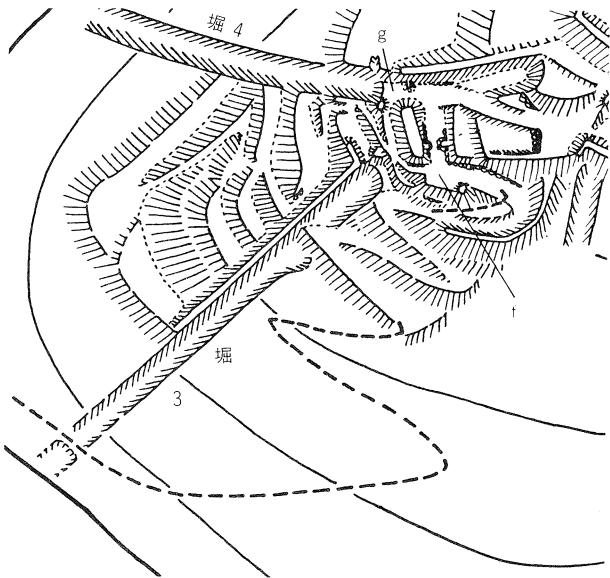


図5 虎口f周辺図

れだけの解釈でf周辺の評価はよいのだろうか。いや、そうではない。われわれは虎口gを見落としてはならない。

虎口gは長く伸びた堅堀（堀4）の中程につくられた虎口である。虎口gの前面で堀4は急激に深さを増し、斜面を削って落ちて行くので、堀の中程とはいえ充分なけじめがついている。この虎口は先に池田誠氏が注目したように、堅堀をうまく利用して出来たものである。虎口gに取りつくためのルートは堀3と堀4に挟まれたテラ

ス状の曲輪群をつないで登るコースに間違いない。しかし、注意が必要なのは、虎口gから南へまっすぐ下る城道が虎口fから下る城道に切られていること、さらにそのまま進むと虎口fの曲輪の斜面に当たって、城道が突然途切れてしまうことである。これらは何を意味するのであらうか。

これらは全て、虎口と城道の新旧関係を示していると考えられる。つまり、堀3と堀4に守られたテラス状の曲輪群を縫つて進むのが当初の登城道だったのが、ある時期、虎口fを開いて、堀3の南側を登るように大きく大手道コースが変更されたのである。その結果、虎口gから直接堀3の南へ出る道は否定された。そしてテラス状の曲輪群は変更後、新しいルートを監視し、側射するための陣地として機能を変えて生きづけた。このためそれへの連絡用として虎口fからテラス状の曲輪群への城道が新設され、虎口gも通用門的に残つたのである。

このように要害山城の各虎口をめぐる改修の過程は、武田的なものから新しきものへの転換の明暗を、象徴しているといえるのである。

四 熊城・要害山城の形成とその背景

第二章で見たように熊城では石垣は認められたものの、それはあくまで壁面維持のために、要害山城のように虎口形成に使用して城郭としての新基軸を打ちだすものではなかった。虎口は比較的単純な構造で、文献の年代と畝状空堀群の存在も概ね一致するといえることから、当初の武田氏の遺構をよく残すものと考えられる。

また第三章の検討のように、要害山城には明らかな改修があるこ

とが確認された。各虎口の改修は一貫して城道を二度屈曲させ、その間に虎口空間を経由させることにあった。表層に現れた形態で分類すれば、①外枠形もしくは、くい違い虎口後方に空間を持つ虎口がa・b・d、②内枠形がe、③馬出しがfである。なお虎口c・gは武田氏時代のものと認められた。a・b・d・fの虎口構成は織豊期に下ることが確実である。とすれば熊城と要害山城は現在見られる遺構年代に六〇年程の差があるのである。ではこうした改修は誰によつていつ行われたのだろうか。

①のくい違い虎口後方に空間を持つという特徴的な虎口構造は織田氏・豊臣氏・徳川氏とその家臣が築いた、「織豊系城郭」に特徴的に認められるものである。このことは要害山城の改修が遺構から見て、明確に武田氏滅亡以降の織豊系大名によってなされたことを証明する。

織豊系城郭ではくい違い虎口と虎口空間の組み合わせの初源は、天正四（一五七六）年の安土城に遡る。明確な外枠形虎口は天正一一（一五八三）年の賤ヶ岳の戦いの陣城で現れる（図四、堂木山城）。しかし当初こうした虎口は主郭前面や、城域先端などに単独で用いられることが多く、要害山城のようにひとつづきになつて連なるのは、賤ヶ岳の戦い以降と考えられる（図四、金川城）。

この時期は甲府では本能寺の変後の甲斐国領有をめぐる後北条氏と徳川氏の争いが徳川氏の勝利で帰結した段階に当たっている。改修は後北条氏との係争中に始められ、一条小山に甲府城が計画される中、引き続き行われたと推定される。

近世城郭に移転する間際に中世城郭を大改修した事例には、天正九（一五八一）年の前田氏の七尾城（石川県）、天正一三（一五八

五）年の金森氏の松倉城（岐阜県）、天正一四（一五八六）年の長宗我部氏の岡豊城（高知県）などが知られており、要害山城もこうしたものの一つといえる。あるいは一条小山に築城が最終決定された前のある時期、要害山城・躰躅ヶ崎館を中心に再度、城下町を建設しようと計画した段階があつたのであろう。だが、各地の事例が城郭と城下町を一体的に形成することの困難さから、結局中世的な場での近世化を断念したように、甲府でもその試みは実現しなかつたに違いない。

しかし、要害山城の虎口eに見られる重厚な門は天正期以降の築造と考えられ、『甲斐国志』のいう「文禄中加藤光泰修理ヲ加フ」に相当するかと思われるよう、要害山城の役割は甲府城と重なりながら長く続いたのであろう。

こうした目で見ると、躰躅ヶ崎館などの評価にも改めて注意が必要である。例えば『浅野文庫諸国古城之図』所収絵図などで知られる主郭東虎口前面や伝二の丸南虎口前面の石積み馬出しは、馬出しの正・側面の堀を欠く形を示す。そのため從来、武田氏の馬出しの初源かのようにいわれてきたが、こうした堀を省略した馬出しは賤ヶ岳の戦いの神明山城などに見られ、馬出しの原形とするより、一旦馬出しが完成した後に出現するタイプと考えた方がよい。明らかに天正一〇年以降の改修とすべきである。城下町を含め、現在わかっているそれぞれの最終形態がどこまで遡り得るのか、発掘調査の成果を合わせて慎重に検討していくかなくてはならないだろう。

おわりに

要害山城・熊城は最初密接な関係を持つてつくられたが、熊城は

比較的早くその役割を終えた。このため武田氏の城郭の展開を検討していく上でひじょうに重要な遺構であると考えられる。また要害

山城は武田氏によって基本プランが確立され隨所に武田的なものを残しながら、それ以降も甲斐国の中心的城郭として強く意識されたため、織豊系城郭としてさらに整えられたのである。

つまり要害山城は武田氏の本城としての歴史的役割と共に、甲斐国の中世から近世へという転換期に、もう一つの重要な役割を發揮したのである。転換期の要害山城・躰躰ヶ崎館を見ることで、甲府城と城下町に何が引き継がれ、何が断絶したか、検討することは今後の課題としたい。

そしてきわめて良好に遺存する要害山城・熊城を研究者だけではなく、広く市民に理解してもらうため、測量図の作成や適切な整備などが進められることを期待したい。

註

(1) 村田修三編『図説中世城郭辞典』第二巻、新人物往来社、一九八七年。

(2) 前掲註(1)文献

(3) 『中世城郭研究』創刊号、中世城郭研究会、一九八七年。

(4) 萩原三雄『戦国武将武田信玄』、新人物往来社、一九八九年。

(5) 千田「中世城郭から近世城郭へ」(『月刊文化財』三〇五号、一九八九年)

(6) 千田「織豊系城郭の構造」(『史林』七〇一二号、一九八七年)

(7) 前掲註(5)論文。

(国立歴史民俗博物館考古研究部助手 千葉県千葉市)